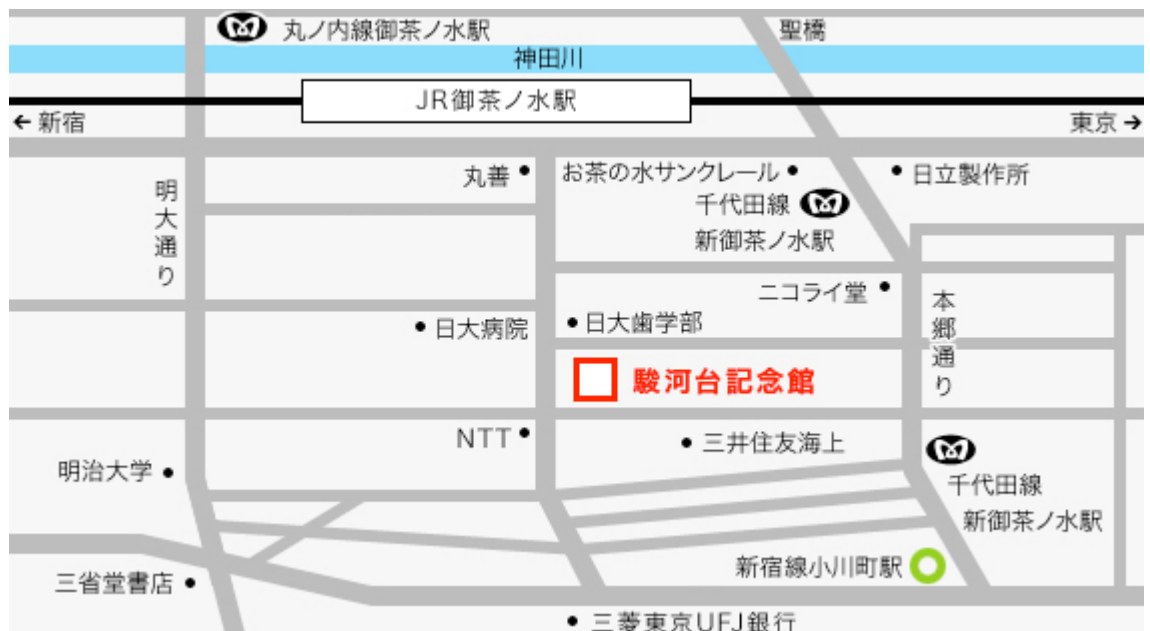


日本英文学会関東支部 第6回大会（2012年度秋季大会） プログラム

日時：2012年11月10日（土）

会場：中央大学・駿河台記念館

〒101-8324 東京都千代田区神田駿河台3-11-5



JR 中央・総武線 御茶ノ水駅下車、徒歩3分

東京メトロ丸ノ内線 御茶ノ水駅下車、徒歩6分

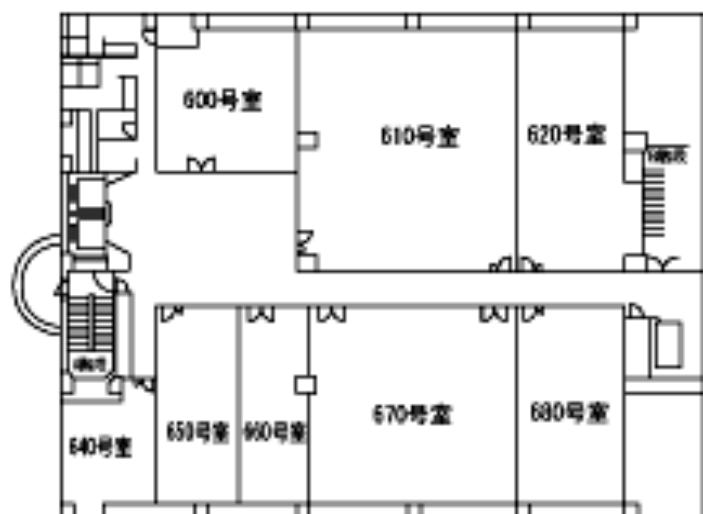
東京メトロ千代田線 新御茶ノ水駅下車（B1出口）、徒歩3分

都営地下鉄新宿線 小川町駅下車（B5出口）、徒歩5分

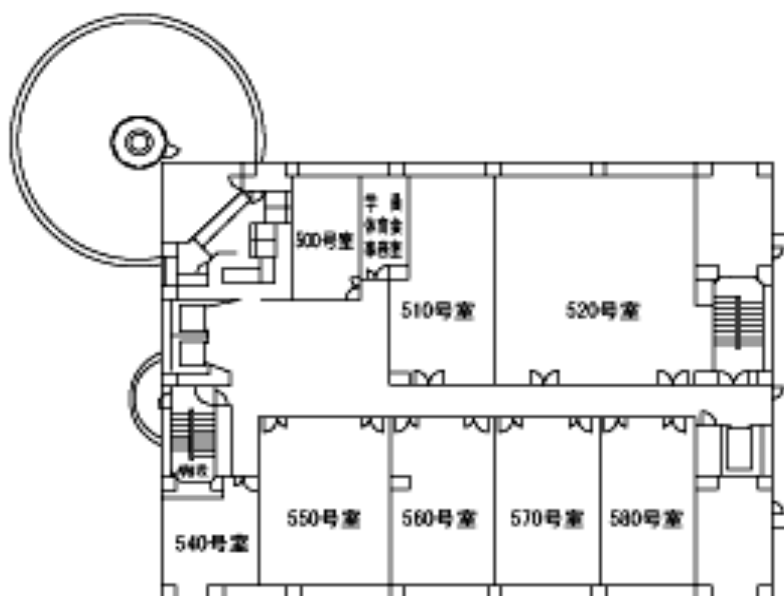
日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2 研究社英語センタービル

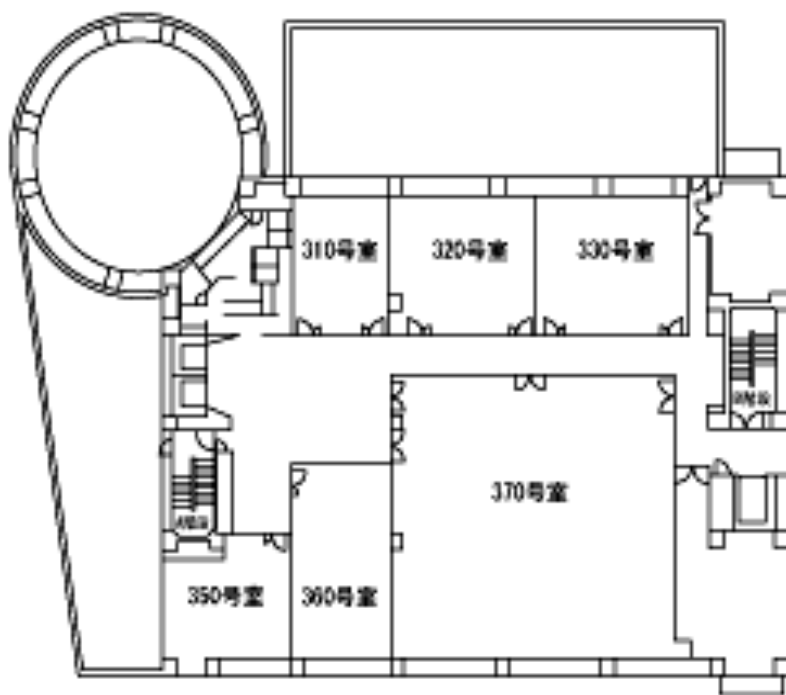
Tel/Fax: 03-5291-1922 E-mail: kanto@elsj.org



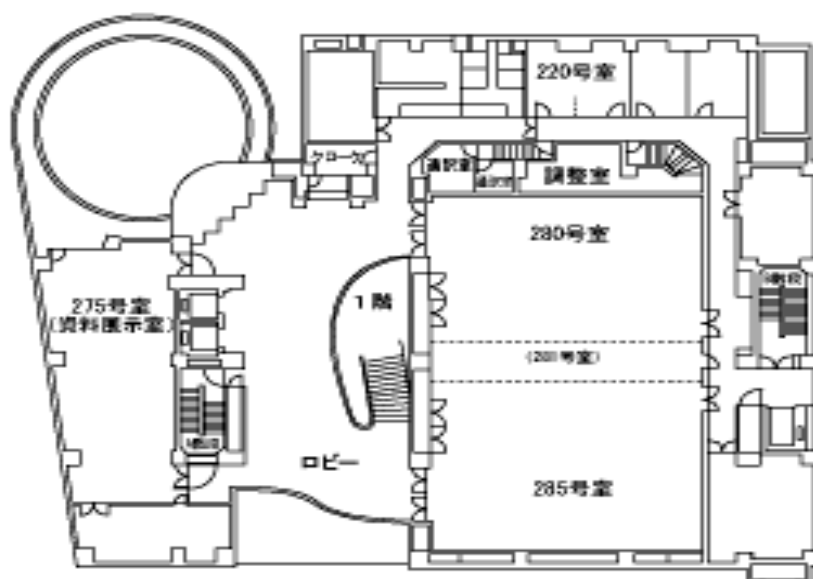
6F



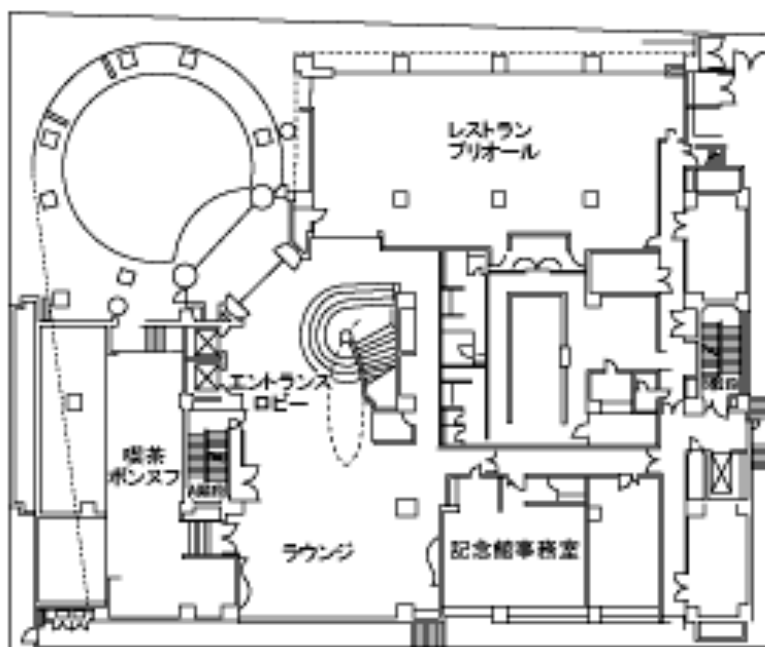
5F



3F



2F



1F

懇親会 (18:30-20:00)

会場： 駿河台記念館 1階 レストラン「プリオール」

会費：5,000 円 (学生 3,000 円)

※事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

開場・受付開始 (12:00 より 2階 280号室前にて)

部門別シンポジウム (12:20-14:20)

1. 英米文学部門シンポジウム (280号室)

英米文学とエネルギー

(司会・講師)	一橋大学准教授	河野 真太郎
(講師)	青山学院大学准教授	麻生 えりか
(講師)	東京学芸大学准教授	山口 和彦
(講師)	東京外国語大学非常勤講師	三添 篤郎

2. 英語教育部門シンポジウム (670号室)

シェイクスピアで英語を教える

(司会)	専修大学教授	末廣 幹
(講師)	慶應義塾大学教授	横山 千晶
(コメンテーター)	明治大学専任講師	今野 史昭
(コメンテーター)	東京理科大学専任講師	北 和丈

研究発表 (14:30-15:30)

第1室 (320号室)

メイジーをめぐるグレート・ゲーム

—*What Maisie Knew*におけるオリエントの表象と帝国の欲望

(司会) 青山学院大学教授 福田 敬子

上野学園大学非常勤講師 松井 一馬

第2室 (330号室)

救済と廃棄

—*Underworld*におけるジャンクアートと都市環境

(司会) 早稲田大学教授 麻生 享志

青山学院大学大学院 日野原 慶

第3室 (510号室)

死者と生者の対話

—*Howards End*と*To the Lighthouse*における語り手のあり方

(司会) 慶應義塾大学准教授 佐藤 元状

早稲田大学大学院 岩崎 雅之

第4室 (560号室)

フィクション作家としての Harriet Martineau

—*Deerbrook* (1839)における心理描写と19世紀初期の心理学

(司会) 中央大学教授 新井 潤美

桜美林大学准教授 大竹 麻衣子

ワークショップ (14:30-15:30 350号室)

※ 公募中につき現時点では未定。詳細は決定次第、支部ホームページ (<http://www.elsj.org/kanto/>) 等にて発表する。

支部総会 (15:35-16:05 280号室)

特別シンポジウム (16:15-18:15 280号室)

座談・旧著「懐」読

—私たちはこんな本を読み、学んできた

(講師)	神戸大学名誉教授	渡邊 孔二
(講師)	元中央大学教授	諏訪部 仁
(講師)	同志社大学名誉教授	能口 盾彦
(司会)	明治大学准教授	中島 渉

懇親会 (18:30-20:00 1階レストラン「プリオール」)

部門別シンポジウム (12:20-14:20)

1. 英米文学部門シンポジウム (280 号室)

英米文学とエネルギー

(司会・講師)	一橋大学准教授	河野 真太郎
(講師)	青山学院大学准教授	麻生 えりか
(講師)	東京学芸大学准教授	山口 和彦
(講師)	東京外国語大学非常勤講師	三添 篤郎

2011年3月11日の大震災とそれにもなう福島第一原子力発電所の事故は、エネルギーが、物質的ならびに言説的にいかにわたしたちの文化と社会の全体に浸透しており、なおかつそれがいかに無意識化されてきたかを痛感させる出来事であった。この事態に直面して、英米文学研究にも必然的な反省が強いられた。そしてその反省は、核エネルギーだけではなく、石炭、石油そしてさらには「マンパワー」など、様々なエネルギーへと向けられもするだろう。本シンポジウムでは、そういった様々なエネルギーを文学の「無意識」として読むことが可能であるかを探究する。それは文学をエネルギーへと還元するという事ではない。そうではなくむしろ、エネルギーを考えることは文学を、(エネルギーをその重要な一部分とする)文化と社会の全体性へと差し向けることになるだろう。

Tono-Bungay と石油の〈帝国〉

河野 真太郎

「文学とエネルギー」という問題設定をするとき、その対象となりうる文学作品は、直接にエネルギーを題材とし、なおかつエネルギーを主題とするもの、エネルギーを題材としつつ、べつの何かを語っているもの、そしてエネルギーを題材としないがエネルギーのもたらす想像力を不可欠な背景とするものに大別できるだろう。この主題をめぐるのは、これらのすべてについて検討を加えることが理想である。本シンポジウムはその入り口に立つものに過ぎないが、本報告では、シンポジウム全体の導入を兼ねて、H. G. Wells の *Tono-Bungay* (1909) を、「エネルギーを題材にしているがべつのエネルギーを不可欠な背景としている」という、少々特殊な作品として考えてみたい。この作品は石油へのエネルギー・シフトを歪曲された形で表象しつつ、それはエネルギーにとどまらない歴史的・地政学的シフトをも物語っている。

イシグロ小説と核エネルギー言説

麻生 えりか

原爆投下の9年後の長崎に生まれたカズオ・イシグロ(1954-)のほぼすべての小説は、原爆あるいは原爆という、途方もない核エネルギーに巻き込まれ家族を失った人々の運命を描いた作品だと解釈できる。「核」が作品中にほとんど登場しないにも関わらず、そのような読みを許容するのはなぜなのか。イシグロは、冷戦期アメリカの封じ込め文化の言説—ポストモダニズムの言説—を支えた二項対立や核家族の称揚という価値観に疑問を呈することで、核エネルギーと人間の共存不可能性を繰り返し描いてきたのである。本発表では、家族の崩壊を描いたデビュー小説『遠い山なみの光』(1982)、家族が不在の『わたしたちを離さないで』(2005)を例に、イシグロが原爆や原爆を家族、社会、さらには現代世界の問題ととらえ、核エネルギーをめぐる言説にいかに入ってきたかを考察したい。

石油と20世紀アメリカ小説—Upton Sinclair の *Oil!* を中心に

山口 和彦

シェールオイル革命を機に、新たに「石油の世紀」＝「アメリカの世紀」を生きようとするアメリカ。「資本への自然からの無償の贈り物」(マルクス)に依拠しながら大きな物語の再構築を目指すアメリカに、現在の文学研究はどのような形で対峙しうるのか。ある批評家がアメリカには偉大な「石油小説」は存在しないと論じているように、「石油」が20世紀アメリカ文学史の無意識であったとすれば、読みの実践としてのアメリカ文学研究にとってそれはどのような事態だったのか。本発表は「エネルギー」が無意識化されている作品ではなく、石油労働をはじめ、「石油」とその周辺問題が表象されている、Upton Sinclairの*Oil!*(1927)を取り上げ、考えてみたい。具体的には、『石油!』が物語構成上、アメリカン・ドリーム、ビルドゥングスロマン、ロードナラティブ等の話型を徐々にずらしながら「石油」の表象を後景化していく一方で、「文化」の問題を前景化させていくことの意味について考察する予定である。

核と学の遭遇

三添 篤郎

冷戦初期の合衆国において、核と学は奇妙な邂逅を見せる。核攻撃直後に、机の下に身を潜めることの防衛的な意義を訴えた短編映画 *Duck and Cover* (1952)は、核という高度に科学的な知を語るために、教員・生徒を主たる役者に据えた。そもそも、マンハッタン計画と原子力委員会を主導し、合衆国の核エネルギー政策の青写真を描いたハーヴァード大学学長ジェイムズ・B・コナントもまた、科学者であると同時に、メリトクラシーの理念を広めた教育者でもあった。この遭遇のありようは、当時の教育雑誌 *School Life* における核エネルギー特集や、コロンビア大学が1951年に設立した教育機関 *The National Manpower Council* などにも見出すことができる。本発表では、第二次大戦直後におけるこうした核と学の遭遇の諸相をたどりながら、エネルギーという科学的問題を、教育という広義の文化的問題に接合することを促した冷戦特有の思考枠組みを解明する。

2. 英語教育部門シンポジウム (670号室)

シェイクスピアで英語を教える

(司会)	専修大学教授	末廣 幹
(講師)	慶應義塾大学教授	横山 千晶
(コメンテーター)	明治大学専任講師	今野 史昭
(コメンテーター)	東京理科大学専任講師	北 和丈

大学の英語の授業でシェイクスピアの作品を扱うことは旧態依然たる英語教育のありかたの象徴のように言われることが多い。シェイクスピアをいくら教えても、いわゆる「使える英語」は身につかないではないか、という議論もよく耳にする。このような「アンチ・シェイクスピア」論にどのような反論が可能だろうか。第一に、シェイクスピアの作品には学生を引きつける魅力があり、それが英語力向上に寄与していると言える。例えば多読教材の中で、学生たちはシェイクスピアの作品を読みたがり、かつ肯定的な感想を述べる。第二に、シェイクスピアの作品が韻文で書かれた演劇であるという自明の点をあらためて見直したとき、授業で台詞のレシテーションを行ったり、ある場面を演じさせたりすることで、発音や発話の訓練を行うことができ、まさに「発信する」能力を養うことにもつながる。

こう議論したとしても、「シェイクスピアと英語教育」について語るとき、そこに生じる問いはこれだけにとどまらない。数ある文学作品の中から、なぜシェイクスピアを選ぶのか。また、シェイクスピアの何が英語授業のどの部分に有効なのか。それは物語性なのか、文体なのか、演劇性なのか、単に知名度なのか。シェイクスピアを使用することで、学生たちは何を学ぶのか。これらの問いにすべて答えることは不可能かもしれないが、シェイクスピアを演じる授業の実演に対して、シェイクスピア研究と英語教育の立

場からコメントし、さらに実演の参加者（当日、フロアから募集）やフロアとの議論を通して、英語授業にシェイクスピアを用いる有効性、あるいはデメリットを浮き彫りにしてみたい。

ワークショップ「『ロミオとジュリエット』を想像・創造する」

横山 千晶

シェイクスピアの世界は五感を刺激する宇宙である。言葉で空間が織りなされ、絵が描かれ、音楽が奏でられる。言語を学ぶ人びとにまずシェイクスピアを体験してもらいたいのは、「言の葉」のこの圧倒的な力を知ってもらいたいからに他ならない。同時に言外の意味を読み解く楽しみも、シェイクスピアはふんだんに私たちに与えてくれる。目の前にある印刷された文字が、想像力を働かせ、音にすることによって、そして他人との協働を通してどのように身体化されていくのかを体験することで、学生の英語に対する、ひいては言葉に対する態度も変わってくることだろう。このワークショップでは、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の1シーンを題材に、身体的な「気づき」と仲間との協働を通してからだと言葉をつなぎ合わせるにより、言語に対する新しい感覚を構築する方法を模索するものである。

※ なお、からだを動かしますので、当日は動きやすい格好でご参加ください。

研究発表（14:30-15:30）

第1室（320号室）

（司会） 青山学院大学教授 福田 敬子

メイジーをめぐるグレート・ゲーム

—*What Maisie Knew*におけるオリエントの表象と帝国の欲望

上野学園大学非常勤講師 松井 一馬

Henry James の1897年の作品 *What Maisie Knew* は、視点人物を限定的な知覚しかもたない幼い少女に設定することで、James 作品における代表的主題である視点と意識の問題を先鋭化する。しかし、見逃してはならないのは、物語を駆動させるのは彼女が見る視線ではなく、彼女を見る視線であることだ。Maisie は自らが周囲に一種の資産として見られ、その獲得を策謀されていることに気付かない点で、James の女性主人公たち、例えば Isabel Archer や Milly Theale らと同質の存在である。すなわち、他の James 作品同様、ここでも視点人物 Maisie に「見えていないもの」こそが重要なのである。この James 作品特有の逆説をさらに推し進め、本論が探求するのは、視点人物どころかひょっとすると James 自身にも見えていないもの、Fredric Jameson 言うところの政治的無意識である。登場人物たちに付与されたオリエントのイメージに着目する時、少女という資産を奪い合う大人たちの金銭的欲望は、当時のパラダイムである帝国の欲望へと変貌する。表面的には家庭的／domestic なこの作品に帝国主義下の国際状況を読み解くことは James 作品の新たな読みの可能性を提示することになるだろう。

第2室（330号室）

（司会） 早稲田大学教授 麻生 享志

救済と廃棄

—*Underworld*におけるジャンクアートと都市環境

青山学院大学大学院 日野原 慶

Don DeLillo の小説 *Underworld* (1997) が特徴的なのは、「ゴミ (waste)」が人間に対し優位な存在として描かれている点においてである。そのようなゴミの優位性は、ここ数年のエコクリティシズムの論調と相性が良い。PMLA 132 巻2号 (2008) の巻頭論文で Patricia Yaeger は『アンダーワールド』の読解を通して「ゴミのエコロジー」という概念を提出している。それは手つかずの自然の理想化という、時に

批判の的となった初期の環境批評によく見られた態度を改め、より現実的かつ現代的な文学を通しての環境の語り方を模索する試みである。イーガーは、この小説を一例とするゴミを扱う芸術作品の要諦が、ゴミを「救済」する作業にあるとする。同様に Elice Martucci も「芸術的リサイクル」を可能にする「救済を行う芸術の力」が、本作では中心化されていると主張する。しかし、本発表では、芸術による「ゴミの救済／リサイクル」という、一見すると政治的、そして環境的に非常に正しいように思われる企図が孕む問題点こそを、『アンダーワールド』は描いていることを明らかにする。

第3室 (510 号室) (司会) 慶應義塾大学准教授 佐藤 元状
死者と生者の対話

—*Howards End* と *To the Lighthouse* における語り手のあり方

早稲田大学大学院 岩崎 雅之

E. M. Forster の *Howards End* (1910) と Virginia Woolf の *To the Lighthouse* (1927) は、死者と生者の対話を扱い、類似したパターンを持って物語を作り出している。Forster はハワーズ・エンドを物語の中心に据え、Woolf は Ramsay 一家が夏を過ごす別宅に中心的な役割を与えている。Forster は物語の随所に一人称の語り手を登場させ、視点を自由に動かし、Margaret Schlegel のヴィジョンを読者に伝える。*To the Lighthouse* の Lily Briscoe は、死者となった Ramsay 夫人によってヴィジョンを与えられる。Woolf は語り手の存在を非個人化し、その獲得を描く。Forster と Woolf は生と死の対話を扱う上で、対極的な手法を用いて読者と共有され得るリアリティを描いている。彼らは人物造形やプロットに関し、互いの作品に批判的であったが、その異なる問題意識は特に語り手の扱い方に表れている。本発表では、生と死の対話を生み出す語り手の個性／非個性に注目し、両作家のリアリズム的及びモダニズムの手法が、大戦前後でどのようなリアリティを想定していたのかを明らかにしたい。

第4室 (560 号室) (司会) 中央大学教授 新井 潤美
フィクション作家としての Harriet Martineau

—*Deerbrook* (1839) における心理描写と 19 世紀初期の心理学

桜美林大学准教授 大竹 麻衣子

Harriet Martineau は、ヴィクトリア朝初期から中期にかけて活躍した著述家として知られているが、その知名度は、*Illustrations of Political Economy* (1832-34) やその後の旅行記、随筆、歴史書、定期刊行物への寄稿、*Daily News* の社説 (1852-66)、自伝など多岐にわたるジャンルを通じて、同時代の社会問題について膨大な著作を残したことによるだろう。しかし、今日、マーティノウを小説家あるいはフィクション作家として記憶する人は少ない。その明らかな理由は、マーティノウが、小説とよばれる作品を唯一作しか残さなかったことだろう。しかし、小説以外のフィクションまで視野を広げると、マーティノウは、啓蒙的意図を含む物語や子供向けの物語、歴史的ロマンス、短編など、多くの作品を残している。本発表では、マーティノウによる唯一の小説『ディアブルック』における心理描写の特徴を、associationism (観念連合説) との関連を明らかにしつつ分析し、この作品が、ヴィクトリア朝初期から中期にかけて、小説というジャンルが人物の内面を描くことへの関心を強めていった過程で果たした役割について考察する。

ワークショップ (14:30-15:30 350 号室)

未定。詳細については、支部ホームページ (<http://www.elsj.org/kanto/>) を随時参照のこと。

特別シンポジウム (16:15-18:15 280号室)

座談・旧著「懐」読

—私たちはこんな本を読み、学んできた

(講師) 神戸大学名誉教授 渡邊 孔二

(講師) 元中央大学教授 諏訪部 仁

(講師) 同志社大学名誉教授 能口 盾彦

(司会) 明治大学准教授 中島 渉

研究の世界は日進月歩。時代が進むとともに学問分野は細分化され、それぞれ枝分かれした先で、高度な専門知識を備えることが求められる。研究者たるもの、最先端の研究についていくには、常に自分の専攻の最新情報に触れていなければならない—というプレッシャーに、我々の多くはいささかの疲労感を覚えながらも、晒され続けているのではないだろうか。

だが、英米文学・英語学・英語教育といった分野の違いに関わりなく、何らかの形で人文学研究に携わる者ならば、誰もが読んでいるはずの—あるいは読んだふりをしなくてはならない—名著というものがあつたはず。和書・洋書の区別なく、当然の教養として我々が読むべきとされてきた、アカデミアの「共有資産」と言ってもよい本を、ここで少し立ち止まり、今一度紐解いてみるのもよいのではなかろうか。

そして何より、こういった研究活動の血肉となりうる名著は、修業時代の若い研究者が、指導教員や学会の先達から何かの折に勧められる形で、世代を超えて伝わっていくものでもあると言える。そこで、本シンポジウムでは、それぞれの分野で功成り名遂げた大家の講師陣をお迎えして、素晴らしい旧著たちをご紹介いただくとともに、その書物にまつわる経験談を大いに語っていただきたいと考えている。

かつての『英語青年』の名物コラムに敬意を表しつつ、時代を経ても決して色褪せない旧著を媒介に、ベテラン研究者の豊かな経験を、これからの英文学界を担う若手へと語り継いでいく機会が、これを契機として再び増えることを願う次第である。

仕事場の英文学—福原麟太郎『英文学研究法』とわたし

渡邊 孔二

20代後半に日本英文学会全国大会で研究発表も済ませ、「パンのための仕事」にも就いていたわたしは、その先が見えない贅沢な壁にぶつかり、悩んでいた。

そんなときにある書店で偶然見つけたのが本書であった。わたしは本書から勝手に「仕事場」(P. Wagner : the British Library)と「諷刺」(M. H. Nicolson : 文学・科学)を引き出したのだが、振り返ってみると、それから数十年にわたって、この幸運な偶然に守られて生きてきたように思う。もちろんそれはわたしの仕事場を多くの方々が無断で横切ってくれたからで、そのことを時間の許す限り、また、個人情報保護法に抵触しない限りでお話したい。主な方々は、青木靖三(思想・科学)、山本忠雄(食べ物)、藤井治彦・海保真夫(辞書・蔵書)、小池滋・宮崎芳三(批評・書評)、朱牟田夏雄・村上至孝(翻訳)、K. Thomas・M. Foot(歴史・政治)である。

学問の三昧境—マックス・ウェーバー『職業としての学問』にふれて

諏訪部 仁

言うまでもないことだが、我々はみな“academic community”の構成員である。この共同体はインター

ナショナルな仮想社会（virtual society）であるが、住民間の連帯・信頼によって成り立っており、公用語はもちろん英語である。なんびとも自分の意志によってここの住民になることができるが、当然そこには構成員としての責務が現存する。

この社会では知識の^{ピラミッド}金字塔を築きあげるべく各人が精励しているはずであり、その建立に向かって多少でも貢献することが各人に期待されている。

この金字塔—知識の集積体—を作り上げるために各人が持ち寄る素材は、「事実」—それが「史的事実」であれ「美的事実」であれ—を中核とした認識群という、なんびともその価値を認める不壊なるものである。全員が協力しあって築き上げるこの共有財産を豊かにすることこそが我々の責務でもあれば喜びでもあり、その時にこそマックス・ウェーバーの言う「第三者にはおよそ馬鹿げて見える三昧境」が味わえるのだろう。

英国小説との出会い—イアン・ワット『小説の勃興』を通じて

能口 盾彦

言語学より文学、詩や演劇より小説に興味を抱いたことから、私は 18 世紀初期から中期にかけての英国小説を研究対象と定めた。そうした中で手にしたイアン・ワット (Ian Watt) の『小説の勃興』(*The Rise of the Novel*, 1957) に啓発され、自己の研究の方向性が決定づけられたように思う。

多作な研究者が輩出される昨今にあつて、ワットは寡作だけれども、彼の残した『小説の勃興』は、18 世紀前期の小説研究の経典として認知されており、特にそのリアリズム論やデフォー・リチャードソンへの論及は傑出していると言える。小説の本質と形成の歴史を系統だって論証した点に、この著作の意義があるろう。

この機会に、『小説の勃興』に見出せる、当時にあつての先駆的なコメント等を指摘しつつ、小説の台頭と社会的事変との符合を説くワットの論法の問題点も考えてみたい。